



## 人権啓発コーナー

### 部落差別のない社会を実現するために

平成28年に「部落差別の解消の推進に関する法律」が施行されたことを受け、県は部落差別の解消を推進し、部落差別のない社会を実現するため、令和2年に「熊本県部落差別の解消に関する条例」を制定しました。

さらに、県内の各市町村で条例が改正され、氷川町においても平成17年に制定された「氷川町におけるあらゆる差別をなくすことをめざす条例」を令和4年に改正しました。

今回は、この改正内容の第1条(目的)を紹介します。

「この条例は、全ての国民に基本的人権の享有を保障し、法の下の平等を定める日本国憲法の理念及び部落差別の解消の推進に関する法律その他差別の解消を目的とした法令の趣旨にのっと

り、部落差別をはじめ、障害者差別、女性差別等のあらゆる差別をなくし、町民一人ひとりの人権意識の高揚に努め、もって差別のない明るい氷川町の実現に寄与することを目的とする。」  
誰もが幸福で大切な人権を守り、差別のない町づくりを推進しましょう。



▲子ども人権教室「ストーンペインティング活動」で描かれたひかりん

問 生涯学習課

☎ 0965・52・5860



## 地域おこし協力隊

## 活動レポート 29



▲3月18日に料理教室を開催し、旬の野菜カルピステーキ、乾燥野菜のスープ、きな粉玉、きゅうりの粧づけを作りました。また、3月30日には農産加工研修センターで、小学生とオリジナルソースを作り、そのソースで「たません」を2個作りました。

### 料理教室 ～旬の料理～

日時 5月20日① ①10時～、②13時30分～(各定員10人)  
場所 氷川町公民館 調理室 参加費 500円 締切 5月12日  
持参物 エプロン、三角巾、タオル、保冷バッグ、水筒  
申込 地域おこし協力隊 蜂須(農業振興課内) ☎ 0965-52-5854



▲Instagram

## 町民文芸

投稿先 〒869-4814 氷川町島地642番地  
企画財政課宛 (毎月5日必着)

### 短歌

祖母無学働く子より便り来て  
読んであげたよ幼き頃に

西上宮 村内 一誠

児が生まれ道行く友と喜べば  
竜北平野に若葉風吹く

北野津 井田 道寛

老いてなお桃の節句のうれしさよ  
ばらずしピンクおぼろちらして

西野津 古崎 スエノ

春の夕二羽の白鷺背を向けて  
小雨の中に飛び去るぬ

西野津 古崎 栄子

常ならば多くの人と賑わ、ん  
小数なれど楽しき花見

吉本 高橋 澄子

### 俳句

庭に咲くエゴ見て暮らす老いの日々

西上宮 村内 一誠

浮き雲を追ふごと崖のかたつむり

北野津 井田 道寛

肩にふれ桜しだれて花ゆれる

西野津 古崎 スエノ

水仙の互いに振れる春一番

西野津 古崎 栄子

友と在り憂き世忘る、花見かな

吉本 高橋 澄子



## 八火図書館だより

新年度がスタートして、あっという間に1カ月が経ちました。少しずつ新しい環境にも慣れはじめた頃ではないでしょうか。  
図書館では、今年度もさまざまなジャンルの図書を揃え、皆さんのニーズに応えたいと思います。

### 新着図書紹介

#### 一般書

継ぐ者

上田 秀人

東大に名探偵はいない

市川 憂人

荒地の家族

佐藤 厚志

継続するコツ

坂口 恭平

#### 児童書

ワニくんのはじめてのおでかけ

古内 ヨシ

ころんけいがわらったら

たて ゆうみ

ふんがふんが

おおなり 修司

リメイク!

あさだ りん

### 2023年本屋大賞が発表

図書館では、毎年恒例の「本屋大賞」受賞作について、特集コーナーを設置して紹介しています。

また、過去の大賞の作品もありま

すので、ぜひ読んでみてください。

### おすすめ図書

102歳、一人暮らし。

石井 哲代

よく寝てよく食べよくしゃべる。こんなかわいいおばあちゃんになりたい!102歳の哲代おばあちゃんの初めての本。おいしい長生きレシピも紹介され、自分らしく心をご機嫌に保つヒントが満載。



問 八火図書館

☎ 0965・62・3489

### 「雪国」VS「山の音」

法道寺 本田 花風

この作品のテーマが主人公の心理の動きそのものにある事は言う迄もないが、その中でも中心的な動きを示しているのは、菊子に対する愛情とも、憧れとも、思いやりとも言える微妙な心理である。そして、そのような信吾と菊子との心の通い合いを中心に、信吾の死に対する恐怖感、老いの諦めといった感情がそれと重層的な表現で書かれている。

評論家たちは、作品の心理描写に重きをおいた評論をするが、それを川端の「愛」の世界としてとらえている。しかし、修一と菊子が円満な夫婦であれば、信吾もこれほどに菊子への「愛」を感じることなかったろうし、菊子も舅に対する「愛」を感じることなかったであろうから、フィクションであってもこのような状況を描けば、文学の聖地を極めることになるのか不思議である。

「山の音」は二人の「愛」だけが全てではない。家族との暮らし、信吾の職場や馴染みの同僚や修一の関係者などとの関係を緻密に描き、鎌倉の自然の美しさを巧みに織り込み、その巧さは川端ならではの技巧であるだろう。